


中長期目標 (学校ビジョン)	聴覚障がいのある幼児・児童・生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。 【数値目標】 「学校が楽しい」への肯定的回答100%	めざす子ども像	【知】 あそぶ・学ぶ・学び合う子 【徳】 やさしく・かかわる・つながる子 【体】 元気でやりぬく子	今年度の基本方針	<基本方針> 1. 子どもが主役となる授業づくりと確かな学力の定着 2. 友だちやまわりの人に進んでかかわり、仲間としてつながろうとする態度の育成 3. 心と体を鍛え、健康増進・体力向上に努める態度の育成 4. 自立と社会参加をめざしたキャリア教育 5. 子どもと向き合う時間を充実するための業務改善		<本年度の合言葉> 「真心・笑顔・感謝」 <学部テーマ> ○幼稚部…「にこにこ・わくわく・なかよし」 ○小学部…「レッツ・チャレンジ」 ○中学部…「レッツ・エンジョイ」 ○高等部…「ドリームズ・カム・トゥルー」 ○支援部…「レッツ・ビー・トゥギャザー」
--------------------------	---	----------------	--	----------	---	---	--

年 度 当 初					評 価 結 果 (2月)		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1. 子どもが主役となる授業づくりと確かな学力の定着 【数値目標】 「授業が楽しい、よくわかる」100%	(幼) (1)体験的な活動を通して様々な事象に主体的にかかわろうとする力を育てる。	(1)きこえにくさにより、情報量が少なかったり興味や関心が広がりにくかったりする傾向にある。	(1)身近な事象に積極的にかかわり、気づいたり、考えたりする。	(1)個々の幼児の実態を把握し興味や関心が持てるような活動を設定する。 (1)具体物や絵、写真などを補助的に使い、内容の理解を促す。	(1)落ち葉や木の実を拾ったり雪遊びをするなど機会をとらえて秋や冬の自然を取り入れた活動を行った。 (1)季節や行事についての理解が深まるよう、絵本や図鑑、掲示物などを時期に合わせて入れ替えた。	A	(1)個々の幼児のより細かな実態把握をもとにした環境の設定と活動内容の精選をする。
	(小) (1)基礎学力の定着に向け、知的好奇心に働きかけるような授業づくりに努める。	(1)児童の実態に幅があり、個に応じた丁寧な支援が必要である。学習規律が身につくにつれ、時間いっぱい活動に取り組むことができるが、語彙の拡大やコミュニケーション方法や文法等表現の力に課題がある。	(1)期待感を持ち、意欲的に学習に取り組む、自分の考えや意見を持ち伝えようとする事ができる。	(1)研究を通して授業づくりや支援について学部で情報交換したり、児童の変容について共有する。諸検査の結果や日々の観察を通して実態を丁寧に把握し、実態に応じた目標や活動の設定ができるようにする。	(1)研究テーマに沿って授業づくりを進めたり、1人1授業の実践を通して授業改善をしたりする中で児童の学習言語の定着や広がりを実感できる場面が多く見られるようになった。学習規律を含む学びのめあてを提示し、毎日の振り返りを実施したことで学習に向かう態度や姿勢が良くなったり、発表時に表現の仕方を工夫する姿が見られるようになったりした。	A	(1)児童の実態把握につながるアセスメントを早い時期に実施する。学びのめあてを個々の実態に応じて内容や数を変える。
	(中) (1)目標を持ち、学習規律を守って意欲的に学習する態度の育成に努める。 (2)集団の力を有効に活用しながら自己の思考力を深めていく話し合い活動の充実に努める。	(1・2)学習状況が様々であり、個に応じた丁寧な指導をすることが必要である。学習規律が定着せず、取り掛かりに時間がかかることがある。友だちや周りの大人の様々な考えを取り入れて、自分の考えをさらに深めていくことに課題がある生徒がいる。	(1)学習規律を守り、本時の目標の確認して意欲的に学習に取り組むことができる。 (2)友だちや周りの大人の意見を参考にして、自らの考えをさらに深め、それを伝え合うことができる。	(1)年度当初、学部全体で確認した学習規律を守るよう生徒同士のかかわりを大切にしながら声かけをしていく。本時の目標達成状況が生徒に分かるような手立てや工夫をする。 (2)積極的に発言したり質問したり友だちや周りの大人の意見を参考にしたりできるよう学習内容や発問の仕方等を工夫する。授業の中に話し合いの活動を設定する。	(1)本時の学習目標や学習内容を明確にし、見通しが立っている授業では学習規律を守って活動ができるようになった。 (2)ヒントを加えたり二択の質問をしたりするなど、発問の仕方を工夫することで、生徒の発言を引き出すことができた。学習の要所所で話し合い活動を積極的に進めることができた。	B	(1)・(2) 今後も以下の点を継続する。 ・学習規律の確認をする。 ・見通しを持って授業に臨めるように、学習目標や学習内容を明確にする。 ・発問の仕方を工夫する。
	(高) (1)一人一人の実態に応じた学習支援の工夫と指導を図る。	(1)基礎学力の定着が課題の生徒や大学進学希望の生徒など学習の習熟度には差がある。また、課題の提出や自主学習などスケジュール管理を含めて指導が必要な生徒がいる。	(1)課題の提出を守ったり、自主的に学習したりする姿が見られ、基礎学力や思考力が向上する。	(1)個々の生徒の特性や進路に応じた指導や支援方法をケース会議や学部研究会などで共通理解し、日々の授業に生かす。	(1)小グループで指導案を検討し、その指導案を用いて一人1授業の実践をし、個々の生徒に応じた支援方法について検討をした。 (1)個々の生徒の特性に応じた指導や支援方法について、ケース会議や学部研究会の小グループで話し合い、授業に活かすようにした。	B	(1)引き続き学部研究を推進し、個々の生徒の特性や進路に応じた指導や支援方法の工夫を行う。
2. 友だちやまわりの人に進んでかかわり、仲間としてつながろうとする態度の育成 【数値目標】 「自分にはよいところがある」80% 「友だちのよいところをみつけている」80%	(幼) (1)身近な人とかかわりを通して、人を思いやる心を育てる。 (2)相手の話を理解したり、感じたことや考えたことを伝えたり表現したりする力を育てる。	(1)一人学級が多く、集団活動を意図的に設定する必要がある。 (2)自分の気持ちを伝えるための表現方法が未熟であったり経験に伴う言葉の定着が不十分であったりするため、やり取りが難しい場面がある。	(1)楽しく活動をする中で、友だちの良さに気付く。 (2)幼児が手話やキューサインを使って相手とやり取りを楽しむ。	(1)幼児が互いにかかわりを深め、協同して遊ぶようになるため、学部での合同活動を意図的に設定する。 (1)教師がコミュニケーションの仲立ちをし、幼児の気持ちを伝える支援をする。 (2)生活全般を通して幼児の興味関心に沿った話題を取り上げ、伝え合う楽しさが感じられるようにする。	(1)隣接する学部の児童と一緒に活動したり、校内探検をして他学部の教職員とかかわりを広げたりする中で、かかわる相手に対し関心を持つようになった。 (1)幼児への接し方を学部内で統一し、過不足のない支援に努めた。 (1)一人1授業を予定通り実施し、事後研究会での話し合いをもとに指導の改善を行った。	A	(1)学部内で集団活動を設定し、幼児同士のかかわりが活発になるように支援や指導のあり方を考える。 (1)隣接する学部と情報共有に努め、計画的に合同活動を実施しかかわりを広げる。
	(小) (1)話を最後まで聞いて応答したり、自分の経験や気持ち等を相手にわかりやすく伝えたりできるよう、表現力の向上に努める。	(1)話を最後まで聞いたり、自分の気持ちを相手が分かるように伝えたりすることの未熟さから、トラブルになることがしばしばある。教師が言葉を足す等仲立ちすることで相手の気持ちを理解しようとする態度が育ってきている。	(1)相手の話を聞き、内容を理解したり、自分の経験や気持ち、考えをまとめて相手に伝えたりしようとする。	(1)他者の考え方や意見を知る場や自分と違う考えを言われた時の答え方について一緒に考える場を設定する。 (2)自分の気持ちや考えを端的に伝えられるよう、まとめ方を一緒に考える活動を設定する。	(1)児童会の話し合い活動や朝の会のスピーチで発表したり質問したりする機会を設定した。継続することで相手の話す内容を最後まで聞くことができるようになってきている。 (2)教科に応じた発表方法の積み上げが定着しつつある。	A	(1)集団での話し合い活動の場面を意図的に設定できるようにする。
	(中) (1)集団の力を有効に活用しながら友だちや周りの大人とのより良い関係を築ける思考力や表現力の向上に努める。	(1)友だちや周りの大人の意見を受け止め、より良い関係を築いていくことに課題がある生徒がいる。	(1)友だちや周りの大人の意見を受け止め、自分なりの考えや思いを持ち、相手や場に応じた受け答えをすることができる。	(1)様々な集団活動を通して、友だちや周りの大人の考え方や意見を知る場を意図的に設定したり、日常生活の中でも使えるように社会生活に必要なマナーやルールについて学び、実践する場面を設ける。 (1)友だちや周りの大人との関わり方やマナー、ルール等については生徒の実態に応じて視覚的にわかりやすい提示や掲示方法を工夫する。	(1)少しずつではあるが教師の指導や支援を受けながら客観的に自分を振り返ることができるようになってきている。しかし、まだ日常生活に般化できているときとそうでない時とある。	B	(1)他者の受け止めや表出について、どこの段階でつまづいているのかの共通理解を図る。
	(高) (1)表現力やコミュニケーション力の向上を図る学習活動の充実に取り組む。	(1)素直で人と関わることが好きな生徒が多い。口話で会話が可能で、手話が必ず必要な生徒、手話でコミュニケーションをとることが初めての生徒など、実態は様々である。相手の気持ちを考えて行動したり、相手や場に応じて自分の考えを伝えるように表現したりすることに課題を持つ生徒もいる。	(1)相手や場に応じて積極的かつ適切にコミュニケーションを取る力が向上してきている。	(1)自立活動などの時間を活用し、手話の学習を取り入れ、相手や場に応じた適切なコミュニケーションがとれるような具体的な学習場面を設定したりする。	(1)帯自立活動や学校祭の各科の取組において、相手や場に応じ伝わりやすい表現ができるよう、手話の学習を取り入れた。 (1)卒業後の生活を見据えて筆談を使ったやり取りを授業に取り入れ、相手に伝わる端的な言葉や失礼にならない言葉の使い方を学習した。	B	(1)引き続き自立活動などの時間を活用し、相手や場に応じた適切なコミュニケーションが取れるような学習場面を設定する。

年 度 当 初					評 価 結 果 (2)月	
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	改善方策
3. 心と体を鍛え、健康増進・体力向上に努める態度の育成 【数値目標】 「自分のめあてをきめて、からだづくりをしている」 80%	(幼)	(1)体を動かすことを好むが、できないとあきらめることもある。	(1)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。	(1)屋外での活動や近くの公園への散歩などを計画的に実施する。 (1)外部講師の指導を参考に、個々の実態に合わせた運動を計画する。	(1)室内でできる鬼ごっこや転がしドッジ、校庭での風揚げなど、教師と一緒に遊びに入り安全に配慮した環境で、力いっぱい体を動かすことができた。 (1)毎日音楽に合わせて体操をし、合同活動で運動をする時間を計画し実施した。	B
	(小)	(1)身体づくりを進める。 (2)粘り強く取り組もうとする態度を育てる。	(1)主体的にサーキットや運動に取り組むことができる。 (2)少し難しい活動でも、教師の支援を受け最後まで取り組もうとする。	(1)サーキットや運動の流れや手順を理解し、自分でできるよう、やり方や順番、終わりの時間を明確に提示する。 (2)児童の実態に配慮した活動の設定や支援の工夫に努める。	(1)児童の身体の動きの変容を話し合い、サーキットの1つ1つの活動やねらいを変えたり工夫したりしながらサーキットに取り組んだ。 (2)活動の手順をわかりやすく伝えたり、自分で確認できるような視覚支援教具の工夫を行ったりすることで、児童が最後まで頑張ることができてきている。	B
	(中)	(1)自己を適切に理解し、心身の健康保持のために工夫する態度の育成に努める。 (2)粘り強く物事に取り組み、体力を向上させようとする態度の育成に努める。	(1)自分の心身の状態を知り、気分転換をしたり友だちや周りの大人に相談したりできる。 (2)掃除時間の雑巾がけや月1回の学部の体力づくり活動に意欲的に取り組む。	(1)気分転換や友だちや周りの大人への相談等の方法を学ぶ機会を学習や日々の生活の中で設定する。 (1)自分の思いの伝え方について特設自立活動(アサーション等)等で学習する機会を持つとともに日々の生活の中で指導する。 (2)掃除時間の雑巾がけや学部の体力づくり活動であきらめずに最後までやりぬける活動を設定する。	(1)個々では見守りや支援が必要な時もあるが、全体的には友だちとのかかわり方を様々な学習を通して学び、実際に生かそうとしているので、そのことでストレスをためている様子が減ったように感じる。 困り感をデイリーノートを通じて訴えることもできるようになってきた。また、それを受けて、早急に対処することに努めた。 (2)あきらめがちになる理由や生徒の実態(身体の使い方の不器用さ)の分析や共通理解が少なかった。	B
	(高)	(1)体を動かすことを好む生徒が多い。自分で起床ができる等生活リズムの確立や衛生管理に課題を持つ生徒、卒業後の余暇活動につながる趣味を持つ生徒もいる。また、卒業後に長時間の立ち仕事にも耐えられる体力を身に付けることや集中力の持続、物事に粘り強く取り組む姿勢を課題とする生徒もいる。	(1)心と体のバランスを整え、様々な活動に最後まで粘り強く取り組むことができる力が身につけている。	(1)生徒の実態に応じた心と体のバランスを整え、最後までやりぬける活動の工夫や、卒業後の余暇活動につながる活動の工夫を行う。	(1)卒業後の余暇活動を見据えて体育で様々なスポーツを取り入れた。その結果、意欲的にスポーツ活動に取り組む生徒が増えつつある。 (1)性教育、薬物乱用防止教室等外部講師を招いて学習をした。学んだことを保健や自立活動、日々の授業と結び付けて深めた。	B
4. 自立と社会参加をめざしたキャリア教育 【数値目標】 「将来のゆめがある」 100%	(支)	(1)保護者自身が今何が必要なのか何に困っているのかわからないことが多い。 (2)きこえにくさからくる困難さに気づきにくく、気づいていても困り感を主体的に改善したり軽減しにくい。 (3)難聴(一側性難聴含む)の子どもに対して、在籍園や学校に課題意識が少なく、情報交換や連携がもちにくい。 (4)新生児聴覚スクリーニング検査後の早期支援は医療との連携も充実し、なされてきているが、それが継続・連続した支援につながっていない。	(1)保護者が子どもの成長に見通しをもち、気持ちに寄り添って楽しみながらかかわるようになる。 (2)自らの課題に目を向け、主体的に取り組んだり困ったときに必要な支援を依頼している。 (3)在籍園や学校が課題に気づき、本校と連携し、必要な支援を受けている。 (4)関係機関と連携し、新生児聴覚スクリーニングでリファー(要再検査)となつてからの不安な時期の保護者支援の構築ができていく。(10月末修正) (4)定期相談につながった保護者に対して、系統だった情報提供ができていく。(10月末修正)	(1)保護者にとってめやすになることばの獲得や聴覚の活用、発達などについて何か1つでも示せる物を作成し、教育相談で活用する。 (1)保護者間でつながり、情報交換できる場がもてるよう工夫する。 (2)通級指導で行う自立活動プログラムを活用し、個々の課題に合った教材を工夫し、それをもとに学習を組み立てる。 (3)支援部だよりなど難聴についての情報を在籍園や学校・保護者に提供し理解を図る。 (3)難聴学級の参観を実施し、子どもの実態を把握するとともに、担任とのつながりがもてるようにする。 (4)各地区ごとの保健師との情報交換を行い、新生児聴覚スクリーニングでリファー(要再検査)となった保護者に対しての支援体制づくりを行う。(10月末修正) (4)保護者が必要としている情報が何か、アンケートを行い、系統だった相談内容一覧表を作成する。(10月末修正)	(1)覚えた手話をつけて歌を歌ったり子どもに話しかけようとしていたりする保護者の姿が見られた。活動の計画を月初めに示した家庭とは、活動のねらい等共通理解が進み、子どもとのかかわりをより楽しむ姿につながった。 (1)年齢別の合同活動や乳幼児全体での合同活動をひまわり分校の乳幼児も含めて実施することができ、保護者同士のつながりのとっかかりとなった。回数的には、1回ずつで少なかったが、子どもや保護者同士のつながりがみられ、有意義な活動となった。 (2)自分のきこえの特徴や身の回りにおける社会福祉の制度など、知識を深めると共に、身近な人に伝えようとする姿が見られた。 (3)情報交換会を実施し難聴児担当者や支援の工夫等の情報交換をしたり、授業で使用できる資料紹介をしたりした。コロナ禍で全ての難聴学級参観はできなかったが、依頼のあった学校へは支援会議等に参加した。 (4)東部・中部・西部の各地区の保健師と、新生児聴覚スクリーニング後にリファー(要再検査)となった保護者への支援について、各支部の取組などの情報交換を行った。 (4)6名の定期相談に通っている保護者からアンケートを実施し、保護者が求めている情報を保護者研修の項目一覧表にまとめた。	B+
	(小)	(1)教師の励ましや支援により、様々なことに挑戦しようとする態度がみられている。 (2)基本的な生活習慣や学校生活のルールについて身につくようだが、教師の確認や声かけが必要な場面が多く見られる。	(1)教師と一緒に活動や学習のめあてを確認し、時間いっぱい取り組むことができる。 (2)時間を確認しながら学習の準備や片付けをしたり、ルールを守って生活したりできる。	(1)個々の実態に応じた目標設定や支援の工夫に努める。 (2)目安となる時刻を児童の実態に応じて提示する。望ましい習慣やルールについて意識を高めるために、定期的に児童全体へ提示する。	(1)活動や学習のめあてについて提示の仕方を教師間で共通理解し統一した。学習途中にもめあてを再確認することにも取り組み、児童の意識の継続につながった。 (2)時計を意識した生活を心がけ、児童の実態に応じて時刻や時間の経過を声かけしてきた。自分で時計を見て生活のけじめができてきた。	B
	(中)	(1)自分の課題に気づき、自ら進路を考えようとする態度の育成に努める。 (2)自己有用感を持ち自ら積極的に行動する態度の育成に努める。	(1)自分の課題に気づき解決方法を見つけ、それを進路実現に生かそうとしている。 (2)他のために、自ら行動を起こすことができる。	(1)・2)自己評価だけでなく、他者評価も取り入れながら、自分の良さや課題、必要な支援を知る学習や支援を行う。 (2)生徒が他のために自ら行動を起こせるときには称賛し、他の生徒にも知らせる機会を持つ。	(1)生活の中のトラブルを当事者同士のみの話し合いにとどめず、全体で話し合うことも取り入れることで、第三者としての冷静な判断をしたりそれを受けてそれぞれが自らの行動を振り返ったりできるようになってきた。 様々な体験や授業を通して、自己理解が進みつつあるが、もっと掘り下げて考えるまでには至らなかった。個々に応じた継続した指導や支援が必要である。 (2)できている場面で本人に対して称賛したり、その内容を「良かった探しの木」で他の生徒へ知らせたりすることにより皆の意識が高まっている。	(1)自己理解を促す活動をさらに設定する。 (2)積極的に行動できない理由を分析したり話し合ったりして指導や支援を共通理解する。
(高)	(1)自立と社会参加を意識した生徒への指導を行い、進路の実現を図る。	(1)3年生については、高等部卒業後の進路については方向性が決まりつつあり、現場体験学習を積み重ね進路を決める段階である。また、1年生については、様々な学習を通して卒業後の進路について考える段階である。社会参加に向け、時や場に応じた言葉遣いや行動について課題を持つ生徒もいる。	(1)自分の進路を決定し、将来の社会生活を意識し、規律(時間・言葉遣い等)を守った生活をしようとする姿が見られる。	(1)現場体験学習や職場見学などを実施し、進路を意識づけるとともに、社会参加に向けて必要な力について考える機会を設定する。 (1)生徒の社会自立を意識した生徒指導が日々の生活の中でできるよう、生徒の課題について職員の共通理解を図る。	(1)現場体験学習や職場見学を実施し、進路を意識づけるとともに、社会参加に向けて必要な力について考える機会を設定した。 (1)3年生においては、生徒の進路や目標に応じて、担任、進路担当と相談し、関係する職員や他機関と連携して進路決定に向けて取り組んだ。 (1)進路担当が学部内で様々な進路や生徒の実習時の様子の情報を提供し、学部内で共通理解を図った。	A

評価基準 A：十分達成(100%) B：概ね達成(80%) C：変化の兆し(60%) D：まだ不十分(40%) E：目標・方策の見直し(30%以下)